啓りて乱れたる世の風俗を糺すべき旨を普ねやつ
と免て野免の俗説と聞どもさるべきなれ
一御武勇の事ハ今さら云ハ及ばれ中ハ一ニ四十二ノ年甲申
四月岩ヶ谷合戦の時御年廿ヶ初てさ讃むの花を
として鬼神と呼被し泰池田の者共を只一騎小切崩
泰安君一番に首を取給ふ叫て是しかん泰武義も
可如池田得入如しと式ふて討死きられぬさこそ家
しき軍なれ乃免甲陽平澄如いそ天正十二甲申年に今
三下を拾ふ羽柴筑前守と家康尾州小牧と云所の合戦
小も外伊吾所を赤鬼と上方侍ヤきら為云

一此君数度御大事の御を蒙ふを給ひし中小も御武勇御智
謀兼備さしる歟然たるもれ成るり先を一に天正十
三年乙酉秋大久保七郎右衛門忠世ぬし多右衛右衛門元忠ぬし
平岩七ヶ郎親吉ぬし等の諸将を大し免御勢七十人を
差向らき信州上田城を攻田左衛門尉昌幸を攻られしが
高田ふ防ひて諸将攻ひくしこ成に城攻の上杉京侍
加勢ぬ出ゆえ加ハ御勢を挙らるべき為再ひ此君
を差向給ふ此時御年廿六ヶ也臺盤の城攻ひく御人
数をひあ給へ是を二ヶハ一ヶ二十四ヶ西子十月
東照宮高吉ヶと御和睦ひて秀吉ヶの母堂大

設所人質として会津に御下向
東照宮家康より御上洛の御為に大坂の御留守
るれば老母の人を撰びて御さき給ふべきに古ハ
て　泰安君是を預らせ給へり是御智勇兼備人ふ
徳れさを給ふ所なる御如諸の記（備前御記　京憲兼記）に云く秀吉
素の母の東行より家康ハ御を被指立と御所や升伊兵部
少輔と申者と申夫ハ聞及さる武士也身ハ尚幸いくつ升
と被仰出家と申ハ義吉聞召相家康名誉の人也此度
我母ハ家康の命の代りや我命の為と申分る内北者
拙義答む花の如き侍大将を幾人召連られる事ハ（揚るに成ぬ少なく）
ふく義物をこし迎もの義に大坂所を無数少輔同道し
て上京とハへと被仰出ことを三ヶ月ハ御居諸将小抽て待従ふる
らを給ふ是ハ御家揚ふるよし云人数付れと是ハ申
御智勇の強すれる利又ハ領地の多も一三十八万度寛秋
冬東御入国の時ハ多御所の為ハ拾万石ろ利しと拾
二万石給ふを給ひ度子の乱の時又彼為に詔て
当の敵石田治部少輔三成か居城江品佐味山及ひ江品
少て十万石与品少て三万石合て十八万石を与し給ふ
是御成功ハ多御所の為英雄にて増ふを給ひ成
へしを四ヶ月ハ文禄元年壬辰年豊吉石朝鮮御征伐の時

東照宮石護屋に御在陣遊ばされ此
君と柳原康政朝臣領地を給し
台徳院を保護しまつりを給へ和泉に慶長五年庚
子の七月奥の上杉景勝を御征伐の時小山にて
南部所御動座の時上方に於て石田治部少輔乱を含
らしきこえけれども引返して諸勢の兵を差向られ時に
下野国忠吉卿を東海道の大将軍として軍事行はれ此
君を本多忠勝朝臣を給へり此時福島左衛門大夫
正則朝臣を初として諸侯の心根探し給ふ諸侯
の軍勢大軍の聞えつるに敵ひかをくたい御家人ひし
てハ此面大将と差向られし
東照宮の御神意実に御器量を御給ひ給ふ
此おっハ只大なるを挙られ其小なるに動ぜ
ざる所なり
一芳ヶ原の役
此君御自迎の御指図し召出されし
下野国忠吉卿を供奉を給ひ大作候と称して福島口陳
の御を知り一番に渡を入軍初しめ給ひしを諸
記録に記すしを只伊勢と尤に当の印を
好し給ひ拔勢けるを給いしやにのこ書るを初

霜に思ふ　此三名の事行はれに於てかく大事の前まで
西夫の功名を求免たまふへき謂れなし是必ず細考屈
しをもひて実録と称す武徳大成記関ヶ原始末記武
徳安民記増補家名日記等ヶ原耳記石卯餘史関原合戦
誌関原大全以下の諸紀録を渉猟せし小各異同あれど
以上も何の訳も辨へすし家に新井筑後守君美如
しの撰ミたれし藩輪譜小此事を評して子細考へき
もし書をれたれ事後世を惑ふ古事
後人不義の記小此遺初小ちれて其ヶ原の御軍八御
猪利と等るもし又之を家小梅野民治井氏の名誉不義の

記小いたく

九月十四日夜福富右衛門大夫西則を以て明日の御一
戦卯ヶ刻ヶ初己の刻まで味方吉刻ヶ初合戦を初
むへし并金吾秀秋獅子形木赤座等合戦ヶ中
裏切事へしと誓約を以て中合ヶ事ハ以卯の刻ヶ
迄合戦初むへしと西則御請申退出す相十右の形
ヶ事て軍令の通諸将各行仕を西し備を操あす前
令の通福富西則魁ヶとして先陣小候して既小
敵陣に臨て矢玉を飛し位を取始ヶ操事とい
ヶ西玉北太軍穂しとして後ヶ入事塩合波

被れ刈流石の福嶋も生下以来かほとれ大合戦度
くしして戦功数多といへとも毋相栄田加為小
西蒲生等の諸将魁をとして福嶋ハいつれ敵軍
なれ猛小況んや此度の戦場日和開ふ以来指を
以て数る程の大軍なれもおしハ敵をられ和
夜明雪晴て西軍の勢中く幸今にも砕これ
悩しき形勢にてふ思時刻あるるり辰の半刻
に及ひ少を　神君陣の御ん内をくらし
められ升伊与殿か補佐政を以て正則西軍
の多勢に対抗して活路を好かしけれ共下

野守忠吉を後ハしして先陣ふあて後を入らせ方ふ北
すんハ今日の勝ハ中くなふ国し正則血気の者なれ
ハ先方陣へ出ハかねて先陣の命令ハ以て先方
を拒じへし
忠吉意を請るるを隠し下野守忠吉物合ふ派
遣るれハ従学ふ共して物ふ和ふ出るを先と陣して
地道てふ迷ふ後を入負し東軍ハ西南に向て津す
西軍ハ東小ふ向て陣す今日己の刻ふハ働ふ在な
為国しと厳令ふ下されれハ政吉を初し退
去し即刻ふ陣ふ為を信ふ迂路ふ三十路

右吉公の命を受け二十騎を以て率し福富の陣所をハ
拙子におるとも除して後を入初免られたり実
小笠ヶ原一番後と変改を移しかや借し所ケ関ケ
原軍功の寂者一番敵の城を賜るハ此合戦空
故一人の功ゆえて御褒賞なりしを後世
も人口に膾されんとおもふやこそ
此記録をもむるて始て雪雪を拭て青天を望む
ごとく多年のふ富一時に解たる計なれハ御一
世の大事なして実ケ原御合戦御褒賞の場を制
給へるゆ拙者一の御先をたれし福富二則弱臣を
超て軍を始給しハ二則弱臣をして憤怒せしむ
一計や又右吉卿を具し奉らきるしハ保治御恩
高ゆ忠吉卿ハ
東照宮の御子ましてきゆ今度東海道の大将軍ゆ
若此君を討をきるハ二則何の面目ゆ
東照宮に対をきるへき也是又京人を必死にるその密
軍や則雪雪双ゆる二則弱臣を我を超たるを怒り具
るゆを討せんるを忘れ憤怒必死の雪怪を以て大山の
巌ゆ如自去二去三ヶ切掛里に入れハこを清田家の二万
の一手場呂をため下駄れゆ見ヶ瀆て御味方の諸将各

移骨を乞し且金百反東切を給ひぬれを西方北十二
万八千餘人市味方の七百余人小切殺られ敗
軍とハなりぬ今度ハ味方ハ敗北市合戦繰れと味方
ハ唯此後初の一挙よりて実小市武雷市右衛のいく
ハ市豊感移し事ハ何さらんや
一又因し敗北口小宮津兵庫入道義弘殿の退口を追
ハを給い此君市を員たせ給ひ初藩輪譜武徳安
民記等小ハ主実を記せ初流布の俗書多くハ誤
る事ハ兵庫をうたを給ひし故小市を員たを給ひた
るやうに記せを是又大なる僻事なを得誤れ多く

ハかりす抑
秦安君ハ忠言御を使を給ひ初度の戦小たゆしき軍
ちたをいけれハ去らく人るれ見を休めておくし侍しけ
る時小宮津兵庫入道敗兵五百余騎を率し牧田の方小
引退を初す宮津と去らしめられと続く味方
るし入道一人ハ生近いたれとて何時の事ハ若
きめんとて多ハ市味方をこるひて豊るしと云兄ぬ
しにてあるを市方の初元の侍雄各内匠三浦十
右衛門弥藤伊四郎の下小一倍の勇五百平旗を巻て
行と告たるけれハ兵初の中元行る子川泳ぎたを見を

れ敵かと問たを給へ早川答て敵ぞいとゝれハ止むるを
元給へ共其に近き給ひ多痛き軍し給いて兵庫入
道既に危く見えしかハ嶋津中務が物ヨ久ぬしを給
十三騎忽に引返し豊久ぬし討死をされ泰安居も敵の
故なる後始て御多勢を給いれも此日小義弘勢
引かゝき義を助めて落延給ひぬ之故
泰安居早川弥五左に給るハ此年家を敵ぶ従
るを者ををして敵と勝て只居るを見れかたを
御石豊感しと叶ふ（年譜附考薩翰譜に見ゆ）諸かふ意の御残ひる
けれ

一此君の御忠志深かりしるハ中くおろかなれ共薩翰譜
に白石先生感称して云
天正十八年庚寅小條家御伝代の時小田原の城を攻ら
るゝ百余日の平野二十余万城中に籠るを
七ヶ所の精兵され共ひきしるハ其故か
一騎とも討えぬる又其攻敗しを保曲輪と中
て城の東かたの又ハ搦曲輪と中に城中より橋一筋
ありして是ハ兵をおして守らハ
徳川辰好見を改て橋かけくと斗四を給いて
又給るを義其改ハ何なるとも心情を

深くあるいつらいているさはるもかの橋もとの下の水乃
流深を四絵ふと橋の下杭たて、水の深さを考へて
を杭をきさして行もに覚束なけれ自らも深に下
りこゝて能足見へ相御前ゑ事初ゑ申きしに
初のとく橋かくと斗仕せられかゝ歩致いなく仕
す免角業しこゝらふほとふ初仕を重しまし四
十日を経る後に拙し自ら夜に入面見い彼
彼橋を踏て来ふ彼橋をくしして渡ふ居く急
き事有て又此とし彼と中に事時
徳川殿甚少てこゝを何れかゝとも為るとも付る

かゝ世と思ひしかハをるとハいそをれき彼斗の事
下知をんハ　家康の方にてハ似合ぬもとをと
の絵ふ歩改ふ思ひしハ相ハ此石歩改加勢少て攻や
ふれとそ居るれたゞしかの橋のもかくまてゐて
せ絵ふハ此所敗るとも此橋を渡りて次の城ふ攻入ら
さらんにて味方の人々を甲斐るしと喝はられ人衆
会合る利とも為い絵ふらんとて已かもふ屋し絵
廣瀬兵庫之斗紀国居して此事歩と云廣瀬
三料義利て加はとも正の何ら人も屋るし攻
撫しらんハ足苦し加ふ人し詮する石もの軍場

の子孫なるを若原原して攻させられんにたとへ攻
撫したらんを何ぞくるしかるべきや又それらの一族の
老武者若者共助せんと言ふを若原原して
ふるはしめらしもをとゝくしれハ日の若原原して
攻らるゝ事もあるいとゝしかるに此義を然るべしとて
六月廿三の夜に入て押寄や攻む東のとく若者
共の親父伯叔父るとくをとゝしほとゝ多勢ふ集て
藤曲輪を攻敗る次の城ふ攻入重政出先をかけ
加の樽の急に押寄自ら法炮をあつる城
中ふ向てたるつむを義某をも言て辺たりかれ

て分間急に裂てたの日の樽を破る重政是を物と
もせず是を自ふして陣の櫓をつさぶるしく敵を
して攻入しほとゝふ士卒るしかハた免らふ次の
城ふ攻入てさんくふ戦いとる是古き人はるを語
まるいしハ　徳川殿の重政是てこの場を筆
給い四十八日を経るし其人を修神たりしこ
とをかゝれ聖人の人を責給ふる皆彩のと
化世の為のるにてしを人の自らふ深ぬとはい
ふ義口につけて云たれハとて義ついを言る
しなしてや戦いよ陪そハ機る陪て変ふ面